

論文の内容の要旨

論文題目 朝鮮の儒教的政治地形と文明史的転換期の危機
—転形期の君主高宗を中心に—

氏名 姜相圭 (Kang Sang Gyu)

朝鮮は基本的に新儒学的な価値基準に基づいて独特に成立した政治構造を持っていたが、これを本稿では朝鮮の儒教的政治地形と名付け、それが歴史的にどのように形成され如何なる特性を持っていたのか考察してみた。そしてここで抽出した朝鮮政治の構造的特性が歴史的に作動する過程でどのように変容していくのかを王権の位相と君臣関係の流れ、時代精神の変化と共に、できるだけ政治史と思想史、対外関係史間の相互「契機的」な関係の変動の中で検討した。

王朝国家において政治的秩序の象徴であり求心軸としての国王の位相というのは、如何なる場合にも非常に神聖なものにならざるを得ない。王は自らの神聖さによって、逆説的に日常的な現実政治の空間と如何にしてでもある程度の距離を置くべきであった。究極的には現実政治から自由ではなかったが、王権が日常的な現実政治から相対的に自立性を確保できないと、些少な政治責任論の是非に引っ掛かって求心軸としての象徴性と神聖性の構築とがほとんど成り立たないからである。したがって、王朝国家における王権とは、政治構造の核心的要素でありながらも、実質的に権力を所持した度合いは政治的伝統や時代的与件などによって相違し、一方、中国の皇帝や西欧の絶対王政期の君主のように、実質的な権力と象徴的な権力が現実的に一致する傾向で現れたかと思うと、他方、武家政権下の日本のように実質権力と象徴的な権力が比較的明確に二元化された形で共存した場合もあったのである。

これに比べて朝鮮の政治的イデオロギーらが提起した政治構想に込められていた普遍的権威は、民本主義に立脚した王道思想と天人合一説による天命思想、治乱史観という循環的時間観念、中華秩序という位階空間で現れる礼に基いた秩序観念等のような儒教的しい体系に内在した普遍的価値の根幹と緊密に絡み合ったものであって、それほど強靱なものだったし、国王の場合にもこのような権威から自由ではなかった。朝鮮における王権の空間は、かかる「理念」的な志向と様々な「制度」—議政府体制=聖賢政治、台諫制度=言路政治、史官制度=歴史の目、經筵制度=教育と疎通の政治、上疏制度=公論政治—などによって日常的に「牽制」されるようになって、臣下らと流動的でありながら緊張した「均衡」関係に置かれるようになる。即ち、朝鮮の君臣関係は根源的な緊張を孕んだまま「相互依存」的に結合していた、といえる。このように「相互依存的緊張関係」とも呼ぶべき朝鮮の君臣関係と「牽制と均衡」を主な特徴とする朝鮮の儒教的政治地形は、以降朝鮮の政治が歴史的に「局面転換」を経験しながら様々な不協和音を出していたにも拘らず、基本的には持続されていくことになる。

一方、十九世紀西洋の衝撃以後、東アジアで現れた一連の「巨大な転換」は、東アジアを構

成するパラダイムが変動していく過程であった。文化的自尊意識と倫理的価値の具現に最上の優先順位を置いた思惟様式が軍事的・権力関係的・政治的問題へ一次的な関心に移していったし、主権国家という「新しい国家形式」と条約体制という「国家間の新しい交際方式」が国際秩序を構成する新しい時代のパラダイムとして浮上していた。東アジア秩序が徐々に動揺する兆しを現している時、朝鮮の政治空間は深刻な危機に逢着していた。当時の支配層は、直面した対内外的な危機状況を直視しようとしないうまま「辺方小国」という変質したアイデンティティの下で、「過去の帝国」へ転落しつつある中国の保護のかさのなかに無賃乗車しようとする態度を示していた。これは牽制と均衡、妥協と調整を独特に導きつづけた朝鮮の政治空間が甚だしく硬直していく事を意味するものであった。

朝鮮の儒教的政治地形の上で正統性の限界を持ちながら幼くして王位に即位した高宗は聖王の修練過程と国内外の政治的状况に接しながら徐々に朝鮮の内と外に対する自分の思考を形成するようになる。即位後経筵に意慾的な態度で臨みながら、高宗は「爲民」政治を實踐できるように導くのが君主たる自分に付与された政治的責任だという事実を切実に認識するようになった。一方、高宗は東アジア秩序の巨大な転換を経験する過程で国内外の様々な事件と各種の情報に接しながら、西洋諸国と西洋化した日本とが勢力を拡散させつつある事を強く意識するようになり、また中国が朝鮮にとっては依然として最も重要な国ではあるが、もはや現実的に世界の中心ではない事を認識するようになった。要するに、高宗は朝鮮の排外政策が時代的な大勢を無視したものであり、現実的に朝鮮が段々孤立する方向に状況が展開しているという危機意識と不満を同時に持つようになったし、このような状況判断は対外政策の新たな方向転換と親政の必要性を強く感じさせる重要な切っ掛けとなったのである。

日本との条約締結を断行した後、高宗が既存の排外政策を本格的に突破できる論理と政治的な切っ掛けを発見できずにいた際、彼に政策転換の名分を提供してくれたのが『朝鮮策略』だった。高宗は、一方では『朝鮮策略』の議論を公論の場に引き出す事によって政策転換の不可避性を訴えながら、他方では文明基準の変化可能性を慎重かつ積極的に打診しつつ折衷的な方式で改革を推進していった。高宗は自分の政治的構想を實踐する機構として統理衙門を設置して外交および通商、武備講究に関する政策を専担させる一方、密かに大規模の日本視察団を派遣し新しい国政運営方向を探索させてから、その後彼らを各々の専門部署に配置させるなど、積極的に開化・自強政策を推進しようとした。しかし政治的葛藤を最小化しつつ改革を推進しようとする高宗の政治的意図にも拘らず、朝野に澎湃としていた華夷論の名分論、強靱な王権牽制の傳統、大院君勢力の政治的影響力、清の政治的圧迫などによって開化・自強政策は絶えず政治的葛藤に繋がっていた。壬午軍乱が外来と固有の諸要素、新たなものと古いものをめぐる葛藤の中で伝統主義者が主導して起こした事件だったとすれば、甲申政変は当時朝鮮の狭小な政治空間で急進的な方式でより徹底的に改革を追求しようとした進歩主義者が起こした事件であった。この二つの事件は相反する方向を志向する勢力が主導した事件ではあったが、妥協と調整能力を示さなかったまま急激な形で起こったというその過程における特徴や、また東アジア秩序が変動しつつ朝鮮問題が先鋭な国際政治的論点として浮び上がっている中で発生する

事によって主導勢力の主観的な意図とは異なり結果的に外勢の干渉をもたらしその干渉を質的に深化させたという点で、類似の側面を帯びていた。その後、甲申政変の余波で守旧的雰囲気 が漂い続ける中、清の宗主権画策、王権に対する牽制がより強化した与件で高宗は外交を通じた自主・独立国の確認に恋々とせざるを得なかったし、こうした状況展開は周知のように、東学農民蜂起という下からの改革の要求と朝鮮をめぐる外勢間の戦争へ歸結するようになる。

高宗は日清戦争前後に現れた朝鮮の「内と外」の危機状況の中で、列強の間に成り立った勢力均衡の状況を利用しつつ、国内勢力の牽制と国際的な圧力によって彼の政治的構想と政策とが実現されにくい状況を克服しようとした。高宗は稱帝を推進し、国号を大韓帝国に変える事等によって既存の天下秩序という位階的な空間で現れた中国天子の権威を公開的に否認し、新たに樹立した大韓帝国が新しい国際秩序の行爲主体たる自主・独立国家である事を対内外的に明らかにした。高宗が大韓帝国の宣布を前後してから「日本新參」の原理を強調するようになるが、これには、甲申政変や甲午改革等に現れた一部の開化勢力の急進的かつ外勢依存的な立場を批判しながら主体的な立場を強調すると同時に、伝統的な儒教的情緒を尊重しつつ新たな思想と制度を折衷して取り入れようとする意志が込められていたと言えるであろう。

朝鮮近代史を取り扱う殆んどの研究は、「富国強兵を成し遂げずに推し進められた高宗のいかなる外交的努力も失敗せざるを得ないこと」を共通して指摘する。しかしこうした分析は現象に対する説明とはいえるだろうが、高宗の政治的対応が「歴史のダイナミックな時代的コンテキストの中で、なぜ、そのような傾向へ進んだのか」という点を具体的に説明しようとしなかった。歴史的な軌跡に対する深い理解なしに、現象的に現れた結論だけを抽出することは、歴史の連続的な側面を見落とさせ、歴史を図式的で盲目的な次元の昔話あるいは物語へ転落させる危険性を内包していると判断される。

文明史的転換期において東アジア秩序が近代国際秩序へ編入される過程で植民地に転落した朝鮮の王権は、東洋的専制君主制の表象として理解される傾向を示しているし、亡国の君主たる高宗は歴史の中で優柔不断な暗君の象徴として伝わり続けている。本研究は、朝鮮半島で近代史学の出発自体が王朝史観を克服する課題から始まった点などに注目して、逆に朝鮮の伝統的な政治秩序を表象する王権とその具体的な人物としての高宗を考察してみた。そして、朝鮮の君主制がいわゆる「東洋的専制君主制」とは大きく異なる事だけではなく、亡国の君主である高宗もやはり、たとえ近代的自主・独立国家を子孫に伝える事には失敗してしまったが、そのために具体的な努力を不断に傾けた事を確認する事ができた。